

二〇二一年度 卒業論文

小説作品の中の親鸞の人物像

コピー厳禁

L180138

藤山 真朋

目次

序論 1

本論 2

第一章 『親鸞』と『弥陀の橋は』、また親鸞の「六つの顔」 2

第一節 五木寛之の『親鸞』と津本陽の『弥陀の橋は』 2

第二節 『親鸞 六つの顔』から見る親鸞像研究 4

第二章 幼少期から念仏弾圧まで、煩惱を断てず悩む親鸞 6

第一節 幼少期から比叡山を下りるまで 6

第二節 青年期から流刑まで 10

第三章 越後・関東・京での親鸞、伝道し念仏に向き合った親鸞 13

第一節 越後、関東での親鸞 13

第二節 京での親鸞 20

結論 25

註

参考文献

序論

浄土真宗を開いた親鸞は、幼少期に登った比叡山を下りて法然に師事し、弾圧を受けつつも浄土の救いの教えを説いてきた。現代において、そのような大まかな親鸞の人生は歴史の講義などでも知ることができる。また親鸞の教えは浄土真宗として教え継がれて周知され、日本で大きな規模を持つ宗派の一つとなっている。そのような親鸞の人生が多くの人々に知られ、浄土の教えが広まる一方で、その教えを説いた親鸞本人については、その詳細な人柄を知ることが難しい。ここで考えたのが、相手の考えを理解するにあたっては、その本人の人柄を知る必要があるのではないか、ということであった。

そのような、昔の偉人の人となりを感じ取ることができるものとして、その偉人について書かれた小説が、一つとして考えられる。小説はあくまですべてが正しいとは限らず、フィクションも盛り込まれたものである。しかし歴史上の偉人を取り扱う際には、作者がその偉人についての様々な資料、文献を元に事前調査することが多く、それらを元に人物像を考察して物語を広げていくものだと思われる。そうして完成した小説作品からは作者が考察した人物像を読み取ることができるのではないかと考えた。歴史的資料から教えを読み解くのはわけが違うが、作者がこの偉人ならどうするかを資料から考察して、生き生きとした物語の中で動かしていく小説だからこそ、その文脈の中で読み取れるものもあると考えている。

親鸞を描いた小説の例には、五木寛之の『親鸞』や津本陽の『弥陀の橋は』という作品がある。今回はこの二つの作品を読み解き、親鸞の人物像の描かれ方の特徴を理解、また双方の描かれ方を対比していく。このことを

通して、作者が書きたい親鸞像の考察、またそれぞれの作品特有の描写とその目的の考察を行いたい。

そしてそれを元にして、現代において我々がどのように親鸞という人物を語り継いでいくべきか、という事柄とその課題について、大澤絢子の著作『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』も参考にしつつ探っていきたい。

本論

第一章 『親鸞』と『弥陀の橋は』、また親鸞の「六つの顔」

第一節 五木寛之の『親鸞』と津本陽の『弥陀の橋は』

初めに、五木寛之が著した『親鸞』についてその特徴を述べていく。『親鸞』は二〇〇八年から新聞に掲載された小説であり、現在全六巻で刊行されている。出家する前の幼少期から亡くなるまでの親鸞の生涯が綴られた小説であり、様々な視点で、緩急あるストーリーがドラマティックに描かれている。また、一部の人物に強い個性が付けられている他、歴史上存在していたか定かではない人物や出来事などオリジナルの要素があり、物語としての展開の面白さを感じられた。例えば物語において、承元の法難で処刑されることになる安楽房遵西は、増悪無碍を勧めるような過激な一念義を唱えており、教えを巡る親鸞との対立から親鸞に危害を加えようとするように、あたかも敵とも捉えられる立ち位置として描かれていた。このようなフィクションの要素について『親

『親鸞 下巻』のあとがきでは「安楽房その他の登場人物は、私の想像の中でさまざまにふくらませてもらった。実在の人物とは異なる物語りの登場人物としてお許しいただきたい」¹とある。親鸞の生涯を描くことだけが目的であれば、このような不確かなフィクション要素は余計と考えられるが、親鸞の話でこのようなドラマを描くには、フィクションとしての人物や出来事を通して描きたいことがあったのでは、と考えた。そのため、このようなフィクション要素が著者にとってのどのような意味合いを持つのかについても考察していきたい。

著者の五木寛之は、『親鸞』の他にも多くの作品を手掛ける小説家・随筆家である。『親鸞と道元』からは、五木の親鸞の捉え方を読み取ることができた。例えば、法然に関して人間にとって大事なことをやさしく教えた人物だと述べた上で、親鸞という思想家について、「親鸞というのは法然に師事して、法然がやさしく教えたことをふかく極めた。」²と語り、親鸞の深い考えを「親鸞の森」と例え、深く研究するには覚悟が必要だという五木の親鸞観の一端が読み取れた。このように五木の言葉からも独自の親鸞観を持って『親鸞』の作成に当たったと考えられたため、これらの意見も交えつつ論じていきたい。

続いて、津本陽の『弥陀の橋は』について述べていく。『弥陀の橋は』は読売新聞で連載された作品で、全二巻の単行本で構成されている。六角堂で夢告を受けてから臨終までの出来事に加えて、歴史資料を元にした記述が述べられた小説である。本書では歴史事象が解説されつつ親鸞の動向が客観的に述べられる形式で作られている。そのためフィクションがほとんど見られない点で『親鸞』と異なっている。

著者の津本陽に関しては『インタビュー 私と親鸞聖人』で詳細を知ることができた。津本は筋金入りの真宗

門徒の家庭に生まれて、幼いころから真宗の教えが近くにあった環境で育った。津本は親鸞を描く作品の執筆にあたって『歎異抄』や『教行信証』を読み込んだと思われるが、『教行信証』の深い意味を読み取るのは難しい、と語っており、津本は親鸞を、器量が大きい人物だと評している。また親鸞の人柄について、「改めて思うのは、親鸞聖人はとても「やさしい方」だということ。厳しさがよく語られますが、やさしさがなければ、絶対他力の境地にはなれないと思うのです。ご自分のことはもちろん、世間の苦しみがよくわかっていらっしやる。それが、やさしさなんです。本当に情の深い方だと思いますね。」³と評しており、親鸞の優しさ、また苦しみを理解できる点である点が印象に残ったのだらうと思われる。このような作者が描いた親鸞はどのような人柄なのか、という点に注目して『弥陀の橋は』における親鸞像を考えていきたい。

第二節 『親鸞 六つの顔』から見る親鸞像研究

本文の目的は、小説作品だからこそ読み解ける、作者が考える親鸞像を読み解くことを通して、現代においてどのように親鸞を語り継いでいけるか、という事柄を検討することである。その参考として、歴史上で行われてきた様々な親鸞像研究が述べられた『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』を取り挙げる。

『六つの顔』では、歴史的に人々にイメージされた親鸞像を形作る要素を「顔」に見立てて、そのうち重要な「六つの顔」がなぜ、どのように生み出されたのかを読み解いたものである。この書を参考にして、世間でなされる親鸞像解釈の例を取り挙げていきたい。

重要な六つの顔として挙げられるのが、「如来の化身」、「法然の弟子」、「説法者」、「本願寺の親鸞」、「妻帯した僧」、「『歎異抄』の親鸞」である。親鸞の死後、覚如によってその生涯を語る絵巻物『親鸞伝絵』が制作され、そこでは、法然の弟子の中でも特別な存在とする「法然の弟子」親鸞、人々に慕われて教えを広めた「説法者」親鸞、奇跡などを起こし偉大で人間離れした「如来の化身」親鸞、といった側面が強調して描かれた。また、その伝絵を掛け軸にした「御絵伝」が全国の本願寺派の末寺に掲げられることで「本願寺の親鸞」が定着したという。このようにして真宗と絡めた親鸞像理解において親鸞は、教えを確立した宗祖として、非現実的な逸話を交えて神聖な存在とされた。これは親鸞没後に、神聖な親鸞のイメージにより真宗を広めるため覚如によって強調されたものであるが、後述する小説作品から読み取られた親鸞自身の遺志とは異なるように思われて、この語り継ぎ方が正しかったのかは疑わしく思われた。

近世以降には、親鸞在世時は異例だった僧の妻帯を行った「妻帯した僧」の親鸞像が唱えられた。そして親鸞が苦悩した様が現れて、様々な研究者を引き付ける『歎異抄』の言説を、親鸞の人格そのものとした『歎異抄』の親鸞」の見方も説かれた。この研究では、「私の渴仰する親鸞聖人はこの『歎異抄』の人格化したる人でなければならぬ」⁴ と言い切り、『歎異抄』を徹底的に親鸞像の根拠として研究した暁烏敏のように、自身が信じる親鸞像の研究が数多くなされたという。そしてこの風潮から、宗門の枠を離れて各々が考える「私の親鸞」といえる親鸞像を語るようになった「大正親鸞ブーム」に繋がったとされる。このため親鸞が一般民衆に広く知れ渡ることになったという。⁵

このように、これまで様々な親鸞の「顔」の研究がなされてきたことを知ることができた。以後小説から親鸞の人物像を考えるにあたって、それぞれの表現がどの親鸞像に当てはまるかを検証、またこれまで説かれたものとは別の親鸞像を模索して、今後の課題を考える際に活用したい。

第二章 幼少期から念仏弾圧まで、煩惱を断てず悩む親鸞

第一節 幼少期から比叡山を下りるまで

まず『親鸞』における親鸞の幼少期から比叡山を下りるまでの時期を考察していく。

幼少期の親鸞こと日野有範の動向が描かれている『親鸞 上巻』において有範は「一步まちがえれば大悪人、よき師にめぐり会えば世を救う善智識ともなるべき相」⁶と言われ、将来の素質が感じられる利口な少年、かつ危うさを感じられる少年とされた。人はなぜ生きるのか、などの疑問を繰り返し心の中で問い、幼いころから悩みを抱える特徴の表れとなっている。また父が出家して母も亡くなり家族の縁を持たないからか、小さい頃から暗さを抱えた少年として、加えて比叡山に「違った世界」の印象を抱いており魅力を感じる放埒者としても描かれている。作中において河原坊浄寛、法螺房弁才、ツブテの弥七などの奇妙な男たちとの交流や日野家の放埒の気質を聞いて、有範が自身の放埒の気質、気ままに生きる気質を認識するのも大事な描写であろう。一方で、使いの帰りに競べ牛を見に行くような、好奇心旺盛で活発な子どものような一面も描かれている。この点では神

聖な親鸞像というものからは離れていて、五木寛之特有の親鸞の捉え方ではないかと考えられた。比叡山への興味や浄寛らのような異形の徒の世界に惹かれる様も、忠範の好奇心が要因の一つではないか、とも考えられた。このような親鸞像描写に加えて、冒険小説のような場面がフィクションとして描かれていた。全編を通して親鸞と敵対して描かれる黒面法師という人物の前身である伏見平八郎が初めて登場し、平八郎が攫った有範の家の召使いの犬丸を奪還するため、浄寛らと協力して屋敷に攻め入る、という一幕があった。このような緩急あるストーリーは、この『親鸞』という作品自体の魅力といえるだろう。

その後出家して範宴となり、比叡山に登って良禅らと学ぶことになる。比叡山期の描写で大きな出来事と考えたのが、傀儡女の玉虫というフィクションの人物との交流である。玉虫に抱き寄せられた範宴は玉虫に対し「異様な欲望」を感じたとされるが、範宴は欲に負けるわけにはいかない、と言い聞かせる。ここから、範宴は女性に対する衝動を感じつつも、それを抑制しようと苦しみにさいなまれているように思われ、このような点から「欲を断てない少年」としての親鸞を小説から感じ取ることができた。

その後山に戻るも悩みは深くなり、聖徳太子にゆかりがある六角堂に百日の参籠をすることになる。この際に周囲の僧は、範宴が疑問にこだわることを咎めたが、範宴は意志を貫いて参籠を行った。そのため作中で範宴は頑固と称され、革新者、言い換えれば放埒者の気質を改めて感じた。また範宴の聖徳太子への思い入れというも「見受けられ、「太子のことがなぜか父親のように感じられ、懐かしく、慕わしい思いが溢れてくる」⁷とされている。ここから、作中で範宴は聖徳太子に父性を感じており、作者にとって範宴の太子信仰は父性、つまり

欠けている家族の縁を感じてのものだったのではないかと思われた。実際に親鸞が太子を「父」と形容した史料も存在したという。そして範宴は三善家の紫野、後の恵信に出会い、範宴は紫野に、観音様のような女性、との印象を抱いて惹かれることになる。その後玉虫と再会した範宴は、その晩玉虫に迫られて欲のままに玉虫に触れようとする、という出来事が描かれる。直後に玉虫が黒面法師に矢で射られたため思いとどまったが、ここから範宴は自らの煩惱を自覚し、改めて愚かな自分、と自身を責めることになり、やがて玉虫や弥七などすべての人を救うため、俗世間で救いの道を模索していくことを決意して『親鸞 上巻』の話が終了する。⁸

このように『親鸞 上巻』では、求道者の素質を持つ人物、煩惱などの悩みを抱える少年、好奇心旺盛な放埒者としての幼少期の親鸞像がうかがえた。ここから、幼いころから度々自身の煩惱に悩み苦しみ、そんな愚かな凡夫でも救われる教えを模索することになる人物として、作者が幼い親鸞を描いたことが読み取れた。これは「六つの顔」のうち「説法者」親鸞の源流と捉えられる。一方で放埒の者として好奇心旺盛な様子が描写される他、親鸞の愛欲の原因として親鸞に欠けた家族の縁だと解釈できる記述がされるなど、五木独自の解釈がなされていた。これはいわば、『六つの顔』で書かれた「私の親鸞」といえるだろう。講義や史実からの知識では親鸞の性格などを測り知られないが、『親鸞』を検討することで親鸞の人間性の根幹が感じられたように思える。

続いて、『弥陀の橋は』で描かれる幼少期の親鸞を検討していく。

こちらの作品では時代背景が詳細に述べられつつ物語が進むため、範宴が山で修行していた当時の戦乱による混乱が印象深く思われた。このような世相や救いを求めて修行する僧侶の生き方が示された上で、「われわれは

何のために現世に現れて努力の数十年を過ごし、死と共に一体どこに去ってしまったのか」と綴られている。

私にはこれが、範宴、あるいは作者が読者に問いかけているように思われた。その後範宴が聖徳太子の墓に参籠を行う中で夢告を受けたことが回想され、それがきっかけで比叡山を離れる覚悟を決めて六角堂に向かう、というのが『弥陀の橋は』の始まりだった。また、範宴は騒がしく庶民が生活するにぎやかな町が好きだったとの記述があり、加えて世俗に生きて教えを広めた賀古の教信沙弥のようになりたいという理想についても述べられていたことから、範宴の世俗に生きる気質、つまり放埒の気質が描写されていた。

また回想で範宴は、煩惱を抑えることができない者とされ、幼少期から自身の煩惱に悩む面も描かれており、この点では『親鸞』での描かれ方と一致した。それに加えて女性に対しての煩惱が抑えられなかった根拠として、愛恋の思いを断ち切れない女性がいたことが語られていた。その女性は三善家の筑前、後の恵信尼である。範宴は彼女と結びつきたい衝動に悩み、「前世からの宿業の因縁」とまで語られていた。六角堂への参籠を思い立つた要因として、彼女を知ってから修行の際に心が乱れることも挙げられていた。『親鸞』と幼名や出会いの経緯は異なるものの、女性への欲を断てずに悩む範宴の一面が感じられた。¹⁰

このように『弥陀の橋は』では、煩惱を抑えられない気質、放埒者の気質などの親鸞の性格の根本が感じられた。加えて死が身近な世相において、なぜ生きるのかという根本的疑問を親鸞が考えていたとすると、同じ疑問を持つ現代の人々の指針としても、津本は親鸞を捉えていたのではないかと考えられた。

第二節 青年期から流刑まで

続いて『弥陀の橋は』で、親鸞が法然門下に入ってから、流刑を受けるまでの親鸞の青年期を考察していく。

『弥陀の橋は 上巻』は六角堂から法然の元に向かう場面から始まる。範宴は法然に自身の煩惱を「恥ずかしい悩みごと」として相談しており、欲に悩む姿が感じられた。質問に対して次々と答えていく法然に、範宴は光明を見出して、法然門下に入ることになるのだった。ここから法然を慕っていく「法然の弟子」親鸞の一端が感じられた。その法然に対する信頼は、「上人にだまされて、念仏して地獄に落ちたとしても後悔しない」という言葉から感じられた。またその後の筑前との会話では、妻帯を迎える範宴の喜びが描かれていた。想い人に率直な範宴の人間性が感じられ、「妻帯した僧」親鸞の性質が感じられた。意外ながらも、感情の起伏が大きい親鸞像が感じられ、津本の描き方の特徴だと考えられた。

その後範宴は名を綽空と変えて、法然門弟の中でも頭角を現し、やがて法然門下でもめつたにない『選択集』の写経を許された。自身の信心も法然の信心も同じ、と考え、他の弟子よりも一步先の理解をしていた逸話も語られた。一方で過激な一念義の例も語られ、美声で女性を惑わす遵西が挙げられていた。このような綽空の教えの理解が進んでいる描写、また他の門徒との対比描写から、ますます「法然の弟子」親鸞が強調されているように見えた。そして遵西らの行動がきっかけで承元の法難が起きてしまう。綽空は遵西の死を悲しむと同時に、内心に朝廷への怒りを抱えることになった。「殺さば殺せという憤怒」という言葉からもその感情が窺える。筆者の津本による「やさしい方」という親鸞のイメージとは異なり、怒りを抱く親鸞の描写に驚かされた。怒りに任

せて、殺すなら殺せ、と怒る綽空の感情が表れており、ここでも綽空の感情豊かさが描かれているように感じられた。やがて法然や親鸞に流刑の処分が下り、次の章に移ることになる。 11

ここまでの『弥陀の橋は』で描かれた、下山から流刑までの動乱の人生の中で描かれた親鸞像は主に、自身の煩惱に悩む人間親鸞、筑前への愛情をあらわにする他、朝廷による弾圧に怒りをあらわにする感情豊かな親鸞、法然門弟の中でも教えの理解が高く、法然からの信頼も厚かったという「法然の弟子」親鸞、などであった。

続いて『親鸞 下巻』での青年期の親鸞像を検討していく。

『親鸞』での親鸞青年期では、法然との関わりが多く描かれた。範宴は法然に引き寄せられていく心地を覚えたとされ、そんな法然を範宴は「大きくて、あたたかい」と捉えた。やがて範宴と法然が対面し、範宴は現世とズレがある法然の教えを「危うい」と評する一方、それは教えが真実に近いがゆえ、さらに法然が一念義を唱えつつも何回も念仏することに対して「上人の心に大きな迷いがあるため」と発言した。また「範宴の信心も法然の信心も同じ」の逸話もこの場面でなされた。このように法然門下の中でも新たな視点でものを見る親鸞の視点の描写は、他の弟子たちが範宴の意見に異議を唱えることも相まって、「法然の弟子」親鸞が強調して描かれたように思われた。かつこの描写から、法然も範宴も迷いを抱えて似ている印象も感じた。範宴が法然門下に迎えられる二年が経つと、門下の中でも側近として信頼されることになる。ここで名も綽空となる。一方、宿坊で綽空の世話をして綽空に恋焦がれる、紫野の妹とされるフィクションの人物の鹿野は、綽空が姉の紫野に心を寄せていることを知り宿坊を出てしまう。傷心した鹿野が情を交わしてしまうのが、法然門下の安楽房遵西である。

この『親鸞下巻』で大きく描かれるのが、安樂房遵西らとの対立である。歴史的には承元の法難で処刑される僧で、『弥陀の橋は』でも少ない記述しかなかった。だが『親鸞』では、法然は過激な方法で念仏を根付かせようとしていると語る過激な一念義を志す人物であり、その障りとなる綽空を排除しようとする。実際の人物像が不確かな歴史の人物に、このような個性付けをするのは大胆だと思われた。このような一念義に対して綽空は「(念仏の救いという)薬があるからと言って毒を飲むことは無い」という姿勢を貫いており、この親鸞の一念義に対する考えを強調するため、遵西には敵役としての個性付けがされたのではないかと思われた。また教えが対立する出来事を通して度々語られたのは、教えを曲解しうる点で念仏の教えは危うい教えであり、浅い理解で読むことは良くない、ということだった。これは、親鸞の考えを「親鸞の森」と例えて難しいものとした五木の親鸞観と一致した考えである。綽空在世時の、悪行を為しても往生の障りにはならないとした、造悪無礙の考え、また現代でそのように誤解している人に向けて、そうではない、と作者は指摘したかったのかもしれない。

鹿野が姿を消した後、綽空は恵心と再会し、互いの心中の告白の後結ばれるという劇的な場面が描かれた。この場面からは、愛する者に対して情熱的な「妻帯した僧」親鸞の側面が感じられた。またある日、綽空に法然は『選択集』を信頼の表れとして預けた。限られた弟子しか読めなかった『選択集』を預ける描写というのは、よほどの信頼の表れであった。また遵西が善信(綽空)に、念仏往生を信じているかを尋ねた場面では、善信は「法然を信じる故にその言葉を信じる、法然を信じるのは上人が私を信じているから」と答えた。法然の厚い信頼を受け、かつ並々ならぬ法然に対する信頼をもつ「法然の弟子」親鸞のあらわれが感じられた。

遵西とのいざこざの中で、遵西と組んだ黒面法師が登場し、多くの人を殺し、父母にも刃を向けた自分も念仏すれば救われるのか、と綽空に問いかけた。これに対して綽空は、一心に念仏すれば救われる、と答えた。物語において非道の限りを尽くす黒面法師のような人物でも救われる、というのはまさか、と思われたが、このことで悪人正機の法然の教えに説得力が増すようにも思われた。この後にも黒面法師は度々、親鸞に対してこの問いを投げかけるため、物語を通して一つのテーマなのではないかと考えた。

場面が進んで承元の法難が起き、遵西らが処刑されることとなる。遵西らの死罪を聞いて善信は「怒りで体が震える、許せない」と感じたとき、朝廷による弾圧への怒りが『弥陀の橋は』と同様に描かれた。流刑前に善信は親鸞と名を変えることを表明し、物語は「激動編」に続くことになる。¹²

『親鸞』における流刑までの親鸞の描かれ方は、とことん「法然の弟子」親鸞の側面が目立ち、法然との信頼などが描かれているように思えた。また小説オリジナルの描写を通して、親鸞の考えの姿勢を示すこと、悪人正機の教えの理解を促すことが促されているようにも感じられた。黒面法師との「五逆の悪人でも救われるのか」という問答に関しても、小説を通したテーマとして考察していきたい。

第三章 越後・関東・京での親鸞、伝道し念仏に向き合った親鸞

第一節 越後、関東での親鸞

続いて第三章の第一節では、流刑を受けた親鸞が念仏を広める、また流刑後の関東や京で活動するなどして念仏を突き詰める親鸞が双方の小説でどう描かれていたかを考え、そこで描かれた親鸞像を考えていく。

『弥陀の橋は』での流刑時の親鸞の生活において、庶民との交わりが特徴的な描写として挙げられる。下人や農民・漁民・猟師が疫病や飢饉と隣り合わせて生きており、また彼らが圧政に苦しむ有様を身近に見て、親鸞は彼らを信仰に導いて生きる光明を与えねば、と感じたとされ、彼らに対する関心を強めていた。またある日、野盗による遺体を発見した時には、泣きつく妻子に憐れみを感じると同時に、野盗のことを想って「殺生を業といたすも、業報のゆえ」として、盗賊たちまでも仏縁にすがらせたいと考えていた。その後やむなく盗賊に協力した奥太夫の話も聞き、改めて搾取される在家の庶民を思うことになる。このような住民の苦悩を知るにつれて、彼らの心にも光明を灯したいと思うようになった親鸞の心中は、衆生を哀れむ「やさしい親鸞」の表れであろう。法然が亡くなった後、「災難がふりかからば虫のごとくに死ぬ衆生を教化して生きるのが、農の行くべき道」

¹³と決意したことも、庶民と関わったことによる決意ではないかと考えられた。

また『教行信証』執筆など、仏法を突き詰め、自身を内省する親鸞も描写されていた。越後の念仏者の最信との会話で親鸞は、専修念仏を貫き、そのために地獄に落とされても構わないという決意を示し、まるで教えに殉ずるかのような親鸞の姿勢が感じられた。また経典研究に励む親鸞は『仏説無量寿経』を読んで、自身の世俗的な煩惱について「内心を指さされるような感覚」を味わった。物欲の少ない親鸞でもそのような心の動きが無いとはいえず、俗に生きる親鸞の心の表れが描写された箇所だといえるだろう。

親鸞の性格の描写も、様々な箇所でもなされていた。例えば最信が親鸞と問答する中で親鸞は「一言に人の肺臓をつらぬく重い力を宿している」¹⁴と評されており、親鸞の魅力との描写だと考えられた。また稲田の道場での説法で親鸞は、聴衆の心にわだかまる迷いに利刃のようによくいでゆく言葉を探し、たちまち見つけ出す、と評され、的確な指摘を行う親鸞の特性を感じた。説法の内容に関しても、繕ったいい加減なものではなく、誠実な教えを語るとされ親鸞の誠実さが感じられた。これらの箇所からイメージできたのは、民衆に誠実に法を説く「やさしい親鸞」像で、津本の親鸞観の表れだと思われた。

親鸞の家族との関係についても言及されていた。ある日恵信尼が、親鸞が観音であるとの夢を見る。ここから恵信尼は親鸞を観音菩薩と信じるようになり、親鸞もかねてから恵信尼を観音の化身と信じていたため、親鸞と恵信尼は互いを観音と思いつく夫婦となる。山伏弁円による命の危機を回避した場面では、恵信尼が「殿は観世音菩薩の化身ゆえ、さような不浄の悪人に害されるわけもありませぬが、どうぞご用心ください」と、親鸞は恵信尼に「わしこそはそなたを観世音の化身と信じておるに」と語って抱き合う一幕が描かれた。¹⁵夫婦の形としては妙に思えたが、そこには確かに愛が確立されており、これは「妻帯した僧」親鸞の、最終的な夫婦の在り方だったように思われて、素敵な夫婦のイメージを感じた。親鸞の子どもたちについても語られ、「この子らとの現世の縁はいつまでつづくのであろうか」「いつまでもかようにありたい」と思う様子が描かれ、家族への執着が十分に感じられた。ところで作中で親鸞は、「すべての衆生をわが肉親と同様にうやまう」¹⁶と述べており、つまり「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり」¹⁷の考えを持っている。すべての人を区

別しないことが親鸞の理想であったと推測できるが、家族への執着と衆生を肉親同様に扱うことは両立し得ないではないか、と考えた。この親鸞の人間観に関しても、また後程考察していきたい。

この他にも様々な親鸞像が窺える箇所がいくつか見受けられた。関東に向かう際に、聖徳太子とも縁があった善光寺を経由し、親鸞は善光寺に向かうことに「わが親の元に還るような喜びとなつかしさ」を感じたとされる。これは『親鸞』の序盤でも見られた、聖徳太子を親のように想う親鸞像の表れに思われた。また山伏弁円との対話の際に親鸞は、儂はそなたと変わらぬ煩惱の徒、と語り、ここから衆生と共に煩惱の徒として歩む「説法者」親鸞像を感じ取れた。また承久の乱を通して念仏弾圧を主導した後鳥羽上皇が落ちぶれ、因果応報ともいえる結果となったが、親鸞自身は弟子たちに、弾圧者らに対して「にくみそしることあるべからず。あはれみをなし、かなしむ心をもつべし」¹⁸と諫めたとき、弾圧当時の怒る様子とは異なり、慈しむ様子を見せた。この寛容な姿勢が示された言葉についてある論文では、この言葉の全文では、自身らが正しいが故に信心を得られたのではない、そのため仏を誇る者たちを責めることはできない、という理由で諫めたことが読み取れることを根拠に、この言葉には他者への寛容性、さらには生命を愛おしく思う生命観が内包されていると考察されている。このような生命観は、縁に左右される人間の悲哀によるもの、とも述べられており、¹⁹親鸞の優しさを感じると同時に、縁に任されることへの悲哀を抱えていたのだろうか、と考えが浮かぶことになった。

越後や関東での生活を通して親鸞の人格が描かれる一方で、親鸞にまつわる不思議な現象の描写もなされていた。例えば越後時代には、親鸞が宙に書いた文字が白紙に現れたというエピソードが語られた。また関東におい

ては、日野左衛門尉が、親鸞が貴僧とされる夢を見た逸話などが語られた。親鸞が仏力を持つ僧、また尊い存在とされる逸話を取り挙げたことから、『弥陀の橋は』では「如来の化身」の親鸞像も扱うのだろうと考えた。

20

『弥陀の橋は』における越後・関東時代は、様々な親鸞像が描かれていた。庶民との交わりを通して、彼らを助けたいという考えを深めていく、津本陽が考える「やさしい」親鸞、つまり「私の親鸞」が主に描かれていた他、実際に伝道を行う「説法者」、恵信尼を観音として愛し執着する「妻帯した僧」、奇跡を起こす逸話が語られる「如来の化身」の「六つの顔」の側面も描かれた。一方で、家族への執着と仏の前の平等という人間観の間の矛盾も感じられ、これが後にどう描かれるのか、京都での描写と併せて考えていきたい。

続いて『親鸞 激動編』での越後・関東生活から考察していくのだが、越後での暮らしにおいて大きな特徴となるのが、「外道院」と呼ばれる人物との関わりである。外道院金剛は法力を持つとされ、貧者・病者・弱者を引き連れるフィクションの人物である。親鸞は専修念仏の立場から認められないとするも、病者などを差別しない点などには共感できるという、ただの敵役として扱いはできない者である。例えば、外道院が親鸞と恵心を試す場面では恵心が病人の体を洗うことを親鸞は思わず咎めてしまったが、この事柄を通して恵心が穢れることを心配した自らを「なんという身勝手な自分」「こんな情けない自分が真の念仏を伝えようとは」と恥じるようになった。またこのくだりでは、病者などを一切無差別に扱う外道院と親鸞が対比されているようにも思われた。『親鸞』ではこのような、おごり高ぶった自身を内省する機会が度々描かれ、「愚に還る」ことが徹底して描写

したものではないかと思われた。外道院の役どころもそのためのものであったのだろうと思われた。

また『親鸞』で初めて「家族の中の親鸞」といえる側面が描かれていた。越後に来て二年目、恵信が身ごもつたと聞いた親鸞だが、それを聞いてよろこびがこみあげず、「自分には人間としての情が欠けているのだろうか」と考えることになる。法然が亡くなった頃、犬麻呂、かつての犬丸が二つの用件を伝えてきた。一つは関東行きの話で、もう一つは、生まれた長男良信を犬麻呂たちに預けるといふ提案だった。後者について、良信を都で育てさせた方がいいのではないかと賛成した親鸞に対して恵心は「どこか親子の情というものに欠けている」と評して、良信を預けることに決まってしまった。これは『弥陀の橋は』とは異なる展開であり、後の善鸞である良信のバックボーンとしての描写、かつ親鸞の子どもへの接し方が表れた描写だと感じられた。このように、なぜか親鸞の子どもへの感情は薄く描かれ、まるで親鸞が家族の情愛を少しずつ手放しているようにも思われた。また親鸞と恵心について、『弥陀の橋は』では互いを観音と考えつつそこに確かな愛があるように感じられたが、『親鸞』では互いの衝突も多く描かれ、恵心が夢告によって親鸞を観音と想いこむ場面は、どこか親鸞自身からの心離れのように想われた。愛する者には感情的で、妻帯して念仏を説いた親鸞という側面も『親鸞』で述べられた親鸞像であったが、今後どう語られるのか、改めて注目していきたい。

下人の鉄杖との交流も興味深く思われた。親鸞の住処に逃げ込み、親鸞を師匠と慕う鉄杖に親鸞は「仏の前には、すべての人は平等だと思っている」と語った。これは『弥陀の橋は』でも語られた親鸞の人間観で、『親鸞』においては後の善鸞との接し方においても関わってくる。またこの鉄杖は後に、自身の人殺しの罪を後悔してお

らず、反省できない悩みを打ち明け、「どうしても至心に自分の罪を悔いることができない人間はどうなるのか」と親鸞に問いかける。親鸞はこれに対して答えを出せず、鉄杖は翌日に自死してしまう。親鸞が答えを出せなかったことで、今後この問いにどう向き合うのかが気になるところである。

関東での親鸞は依然として親鸞は經典研究などに励んでいたが、愚に還れ、という法然の考えとの矛盾を淨寛に指摘される。これに対して親鸞は、法然上人の念仏の教えを正しく受け止められているかに悩んでいると語りつつ、真の念仏の教えを掴むために学んでいる、と答えた。つまり、親鸞がただ法然の教えを信じるだけでなく、研究を通して自身の念仏の教えを確立しようとしているように思われた。つまり「法然の弟子」親鸞から進んだ、親鸞独自の考えを説く「説法者」親鸞の側面が感じられた。また、増悪無碍の黒念仏をめぐって、それを主導する黒面法師とのいざこざが描かれる。親鸞に対して黒面法師は「自分のような五逆十悪の悪人でも救われるか」と改めて問いかける。それに対して親鸞は「信じて念仏すれば救われる」と答え、見せしめとして人質の明法房が指を折られてもなおその姿勢を貫いた。この出来事を通して、改めて念仏すれば救われるとした親鸞のスタンス、また増悪無碍の考えと比較した親鸞の考え方が強調されて描かれていた。このような場面から、教えを突き詰める念仏者としてのイメージが感じられた。一方で、親鸞と恵心の喧嘩の場面では感情的な親鸞の姿も描かれていた。親鸞が感情的に怒った描写に、一介の凡夫のような親鸞の姿、また他者との向き合い方に難を抱えた親鸞の姿を感じるようになった。²¹

『親鸞』において、越後での生活は、外道院との関わりの中で愚かな自己を再認知する機会が多く、親鸞にと

っての気付きの期間だったように思われた。また薄情とも捉えられる親鸞の家族観も描かれた。関東における親鸞は、人々への伝道を繰り返して、人々の心を掴むことに苦心しており、念仏についての悩みを繰り返していた。ここで主に描かれていたのは、自身の念仏道を模索して信念を貫く「説法者」親鸞、煩惱や衝動を抱えた人間親鸞、情に欠けた親としての親鸞像であった。これを踏まえつつ京での親鸞の描写を論じていきたい。

第二節 京での親鸞

続いて、京都に戻ってから臨終するまでの親鸞の生活から考察していく。この時期には、親鸞の子である善鸞との関わり、また善鸞の義絶という特徴的な出来事があった。このような親鸞の家族との関わりから、親鸞の家族観、というものについて考察できると考えた。このような、いわば「家族の中の親鸞」というものは「六つの顔」の中に挙げられていないが、新たな描かれ方の型として定義できるのではないかと考えた。

『弥陀の橋は 下巻』において、生活の困窮から、恵信尼は善鸞を除いた子どもを連れて越後に戻っていた。家族への執着が感じられた「弥陀の橋は」の親鸞にとって辛い決断であっただろう。これは見方を変えれば、家族に執着するも、浄土の教えの研究を優先して稼ぐ手段を取らなかった、家族より「説法者」としての道を優先したことの表れとも考えられる。妻帯して家族を得て、その家族を連れて京都に戻るといふ家族に執着する様子と、独自の浄土の教えを説き人々を導く念仏者としての立場は両立できないのかと考えることとなった。

一方、自分が関東を去ってから、道場主同士の対立などの懸念は残っていた。そこで善鸞が親鸞の名代として

関東に出向くことになった。このとき、善鸞には念仏門の最高指導者としての地位を得る野望があるとされていた。だが親鸞と門弟は支配関係ではなく、親子にも近い同朋の関係だといえる。そのためか文中で善鸞は、親鸞の子として尊敬を受けても、自分に対して絶対の尊敬が向けられないことに不満を感じた、とされている。その後親鸞に、善鸞が秘法と称して法を説いていると知らされ、やがて親鸞は善鸞を義絶する。義絶状で親鸞は「父を殺す五逆」や「子と思うことも断念」などと述べていたが、もし善鸞を子と考えていたとすると、親鸞の「仏の前の平等」は叶わないことになる。親子の関係と浄土門の同朋という関係に、線引きが完全にはできていなかったのではないかと感じた。そのような自己矛盾に対しても、親鸞は悩んでいたのかもしれない。京都の親鸞の元に教えを求めて弟子が集まる様は「子が親を求めるようにして」と形容されていたが、もし実の子には同じく門弟としての扱いをしていたとすると、この記述も実の子の善鸞への皮肉にも見えた。

善鸞の義絶、また友人の逝去などを経た親鸞について「どれほど恵信尼に苦しみを訴えたかったか」と述べられており、孤独を深めて家族に執着する様が見て取れた。また『教行信証』の信巻では善鸞を弁護したととれる箇所があった。ここでの善鸞弁護からも、親鸞の優しさ、あるいは義絶に自身の責任を感じて弁護する、善鸞という家族への執着がうかがい知れた。やがて九十歳で病床に着き、亡くなった。²²

これで『弥陀の橋は』が完結した。作中で親鸞は『教行信証』を書き上げ、念仏門を突き詰める立派な「説法者」の印象が感じられるその一方で、親鸞が皆を同朋とする考えと家族への執着という重大な矛盾を抱えた親鸞というものが感じられた。歴史的事実とほぼ変わらず、念仏の教えを突き詰めた念仏者親鸞と、暴走した善鸞が

描かれた『弥陀の橋は』と比べて、『親鸞』ではどう語られるのかが気になるのである。

『親鸞 完結編』は、親鸞帰洛から九年が経ち、怪僧の覚蓮坊が申丸に、親鸞の『教行信証』を取ってくるように依頼するフィクションの場面から始まる。覚蓮坊は、親鸞と比叡山で修行していた良禅であり、専修念仏を説く親鸞を敵視する口ぶりをしていた。完結編における敵役ともいえる人物と考えられるだろう。

続いて親鸞と善鸞、善鸞の妻の涼とその子の如信、そして唯円らの暮らしの様子が描かれた。この場面で親鸞は、「自分には親としての資格が無い。」「人の子としても、夫としても、まともではない。」「そもそも家族というものの深い絆を、親鸞はこれまで身に染みて感じたことが無い。」などと内省することになる。²³この親鸞の家族観は『激動編』でも示されていたが、ここではあまりにも直接的である。善鸞については、その人格には問題が感じられたが、親鸞の深すぎる教えを理解できず自分を責める真面目さを備えていた。また両親の元を離れて育てられたことから、自分を手放した両親への疑問を感じて思いつめる様子も描かれた。そのため、善鸞の人格形成については親鸞の責任を感じた。その後親鸞と善鸞が対話する場面で、親鸞は「わたしはそなたを自分の息子とは思っていない」と善鸞への感情を語る。善鸞を京都で育てさせたことについては「田舎で育てるよりも、都で様々な勉学の機会をあたえたかったから」「慣れない北国での暮らしの中で、幾人もの子を育てることが重荷に感じられていたのかもしれない」と思いを語る。そして「わたしとそなたとは、親でもなければ、子でもない。」「親鸞が一生をかけて信じつづけてきた真の念仏の、もっとも大切な担い手だと思いたい」と、念仏の担い手としての善鸞への信頼を語る。²⁴これは念仏者が同朋にかける言葉としては正しいかもしれないが、

これは血の繋がった親と子の会話であり、親としては不適切な子への向き合い方に思われた。場面が変わって唱導を志すようになる善鸞に対し、親鸞はそれに賛成し、その唱導を聞いてみたいものだ、とも告げた。あくまで独自の伝道を確立した念仏者として、という見方だと思われるが、善鸞の意志を応援して親鸞なりに息子に寄り添おうとしたのではないか、とも考えられた。その後、実績を積んで東国に赴くことになった善鸞に対して親鸞は、真の念仏者としてふるまってはならぬ、と念を押すのだった。ここまで善鸞への接し方が描かれた一方で、越後の恵信についても描かれていた。それによると、作中で親鸞は越後の恵信に自分から手紙を送ることはしなかったという。だが教えへの疑問に関して門弟に手紙を送ることはしている。これは妻に無関心なようで薄情に思われ、このことを娘の覚信尼に指摘されていた。もっともな指摘だろう。

念仏門の求道者としての側面も描かれていた。親鸞は『教行信証』に加筆を続けるほか、唯円との対話で、浄土を信じてはいるが、この世への執着が消えない旨を告白した描写もなされた。そのことで親鸞も迷っていると述べており、改めて親鸞が、救いの法を求めて迷える人物であるとの描写だと考えられた。

場面が変わって親鸞が、財力を持つ商人の竜夫人に招かれ対面し、竜夫人は柴野の妹の鹿野だったことが分かる。そして遵念寺の法要という『親鸞』で最後の大きな動乱が起こる。竜夫人に誘われて唯円と共に法要に赴くと、その機会を狙った検非違使の者や僧兵、そして覚蓮坊らが親鸞を捕らえるために現れるも、竜夫人が呼んだ助け、外道院らの登場で危機を回避することができた。これで親鸞と、鹿野や良禅などの人物との因縁に区切りがついた。これまでの登場人物を巻き込んで一区切りがついたことに、『親鸞』の小説としての面白さを感じた。

その後親鸞は、善鸞が関東で、親鸞の名代として新しい念仏を唱えたことを知る。これを聞き親鸞は、自身の教えの中で人々を迷わせるものがあつたのではないかと考える。ここで、筆者が考える浄土真宗の教えの危うさを示しているように思われた。この善鸞の暴走に対して覚信尼は、親の情が欠けた接し方をした親鸞の責任だと親鸞に対して指摘した。そう指摘した覚信尼に対して親鸞は「阿弥陀仏の前では唯円も善鸞も同じ凡夫」と言うのだつた。ここまで『親鸞』を読み通して、善鸞の暴走の原因として、親鸞の善鸞への向き合い方があつたのでは、との印象も受けていたが、ここまで親鸞の責任ということに言及しているのは珍しく思われた。浄土真宗の教えの祖としては立派な親鸞ではあるが、このような子へも向き合い方、つまり「家族の中の親鸞」は問題があつたのではないかと、と筆者も考えていたのかもしれない。やがて親鸞は善鸞を義絶することとなる。

ある深夜、黒面法師が親鸞の前に現れ「自身のような十悪五逆の悪人でも往生できるのか」という問いかけをまた投げつける。これに対して親鸞はやはり「心から懺悔して本願を信じたら往生できる」と答える。黒面法師はこれに反論するように「真の悪人は懺悔を知らず、生涯、弥陀の救いを信ぜぬ者」と言い捨てその場から消え失せる。その後親鸞は、黒面法師は自分の影だつたのか、と考えていた。仮に黒面法師を親鸞の迷いと捉えたと、親鸞は内面に迷いを抱えながらも、悪人正機への一貫した姿勢が描写されていたように思われた。ここで鉄杖が問いかけた「至心に自分の罪を悔いることができないう人間はどうなるのか」の問を思い出した。最終的に答えが出せたのかは不明瞭だが、そのような罪を悔いることができないう、黒面法師が言うような「真の悪人」こそ、弥陀が本当に救うべき対象だ、という考えが親鸞には定まっていたと考えたい。やがて親鸞は病床に就き、親鸞を

如来の化身と信じるようになった覚信尼は、親鸞について「体が衰えて仏さまに似てきた」「往生の際には驚くような奇瑞が」と述べた。これは親子観など人間離れた認識をもつ親鸞に対しての、皮肉を込めた表現のようにも思われた。そして親鸞は亡くなり、奇瑞なども起こらなかったと綴られて物語が終わりを迎えた。²⁵

『親鸞』における、研究を重ねて『教行信証』を書き、皆を同朋とする立場を貫き、黒面法師の問いかけにも一貫した姿勢で臨んだ、極限まで「説法者」を貫いた親鸞の姿は立派なものだった。だが善鸞を実の子ではなく同朋と扱うこと、恵信に手紙をも出さず無関心なのかを疑ったことから、どこか家族に対して情が薄い親鸞の家族観が表れていた。これは親として、また家族としての親鸞の問題点ではないか考えられた。この家族観の原因として、父が家を出て、自身も寺に入って弟らと別れたことで、親鸞自身の家族の縁が薄い境遇が挙げられると推測した。このように親鸞の欠点を指摘するような描写は、五木特有の描き方だといえるだろう。

結論

ここまで『親鸞』と『弥陀の橋は』を読み進めて考察した、そこで描かれる親鸞像やその語り方をまとめる。『親鸞』と『弥陀の橋は』で共通して描かれていた主な親鸞像として、煩惱に悩む幼少期の親鸞、法然と互いに信頼し合う吉水時代の「法然の弟子」親鸞、庶民との交わりや布教を通して念仏を再検討する越後・関東での

「説法者」親鸞、『教行信証』を書き上げて教えを突き詰めた晩年の「説法者」親鸞が描かれていた。

また、それぞれの小説で独自の親鸞描写も描かれていた。

『弥陀の橋は』は、歴史的背景を語りつつ話が進み、親鸞の描写がなされた。その中で自身の生き方を問う親鸞の他、庶民の困窮に気付いて彼らの救済を切に願う、津本陽が「やさしい」と称した親鸞、人間的確な指摘を行い、人々が惹きつけられる親鸞の姿が描かれていた。また「六つの顔」のうち『親鸞』ではその描写が少なかつた「如来の化身」親鸞が、奇跡のような逸話を多く描くことで描かれた。加えて『弥陀の橋は』において「家族の中の親鸞」が読み取れる描写として、恵信尼や子どもたち家族に執着する親鸞の様子が描かれた。特に親鸞と恵信尼について、互いを観音菩薩と想い合いつつ確かな愛を築いていたという、親鸞特有の家族の在り方が述べられていた。だが親鸞は仏の前の平等を説いており、親鸞の家族への執着とは矛盾するように思われた。

『親鸞』では、緩急あるストーリーと様々な登場人物による個性的な親鸞の描き方がなされた。物語や人物との交流を通して、好奇心旺盛な少年親鸞、関わりの中で愚かな自己を再認知する親鸞など、五木寛之特有の親鸞の描き方がなされていた。また黒面法師との「五逆十悪の悪人でも救われるのか」という問答が小説全体を通してなされ、それに対して悪人でも救われると答え続けて意志を貫いた親鸞が描かれており、求道者として立派な姿が描かれているように感じられた。一方で『親鸞』における「家族の中の親鸞」の描写としては、生まれた子どもに対して情が薄い様子、息子善鸞に対して念仏門の同朋として接した結果関東での善鸞の暴走に繋がったこと、恵心に対して手紙を出さないことなどが描かれ、このような親鸞の家族観に疑問を感じるようになった。

両作品では家族に対しての親鸞の向き合い方が描かれ、「家族の中の親鸞」を見出すことができた。ここで「家族の中の親鸞」の今後の在り方を考えるにあたって、その考証として寺川幽芳の『親鸞の家族観』を取り挙げる。これは、核家族化などの家族様式の変化・家庭内暴力などの家族問題に宗教としてはどう対応すべきかを、親鸞の家族の在り方や参考にして論じたものである。ここでは恵信尼との関係について、愛情が宗教的なものによって支えられた深さと強さに満ちた、互いを観音と思う深い敬愛があった、として『弥陀の橋は』と似た捉えられ方がなされている。また、すべての衆生を同朋として捉える「一切の有情は、みなもて世々生々の父母兄弟なり」という親鸞の人間観・家族観を、超世俗的家族観として位置づけた。寺川はこの親鸞の見方を、家という定位を超えた高次の永続性を持って存在する家族モデルだと捉えており、今後の核家族のモデルとして提案していた。²⁶ 『弥陀の橋は』での、夫婦が互いに観音と想いつつ愛情を確立する描かれ方は、良い関係にも思われるが、宗教的な側面が強い夫婦の在り方にも考えられ、一般の過程で活かせるかは不確かである。『親鸞』で述べられたような、極端に家族への情が薄い態度で家族と向き合うことを良しとすることは難しいだろう。だが作中で親鸞が善鸞を念仏門の同朋と捉えたように、家族に対して家族という範疇を超えた一人の人間としての捉え方をするのは今後の家族の形として生かせるということなのかもしれない、と考えられた。

このように『親鸞』と『弥陀の橋は』で共通の、あるいはそれぞれで異なった親鸞像が描かれて、それぞれで独特な親鸞の伝承がなされていた。それにより、普段知ることが叶わない親鸞の人格・性格・人物像について、生き生きとした形で想像を巡らせることができた。このような、物語を通して生き生きとした姿を描くことがで

きる小説という描き方は、親鸞を語り継ぐ上で有効だと思われた。

また今後の親鸞の語り方の有り方を考えると、『弥陀の橋は』のように、客観的評価や歴史的事実に即した事績を語り継ぐ親鸞の描き方はもちろん大事である。一方で、五木寛之が描いた親鸞からその家族観に疑問を感じたように、各々が親鸞に感じた主観的な評価を唱えていく、いわば「私の親鸞」を語ることで、親鸞像が生き生きとした形で人々の記憶に残り、望ましいのではないかと思われた。つまりは『親鸞』のような主観的描写と『弥陀の橋は』のような客観的描写の両立が、これから多くなされることが望ましいのではないか。ただ上人として親鸞の功績を称賛するばかりではなく、落ち度と考える箇所を指摘することで、欠点を備えたただの人として身近に親鸞を記憶に留め置けるのではないかと読み取られた。それが、教信沙弥のように名も無き聖として生きることを望んだ親鸞の願いでもあると、私は思うのだった。

コピ

- 1 五木寛之『親鸞 下巻』講談社、二〇一〇年、三一七頁
- 2 五木寛之・立松和平『親鸞と道元』祥伝社、二〇一〇年、三七頁
- 3 青木新門・上田紀行・津本陽・釈徹宗・高史明・松田正典・香山リカ・梯實圓『インタビュ―私と親鸞聖人』本願寺出版社、二〇一一年、三八頁
- 4 大澤絢子『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』筑摩書房、二〇一九年、一二四頁
- 5 大澤絢子『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』筑摩書房、二〇一九年
- 6 五木寛之『親鸞 上巻』講談社、二〇一〇年、四九頁
- 7 五木寛之『親鸞 上巻』講談社、二〇一〇年、三〇一頁
- 8 五木寛之『親鸞 上巻』講談社、二〇一〇年
- 9 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻』読売新聞社、二〇〇二年、一七頁
- 10 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻』読売新聞社、二〇〇二年
- 11 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻』読売新聞社、二〇〇二年
- 12 五木寛之『親鸞 下巻』講談社、二〇一〇年
- 13 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻』読売新聞社、二〇〇二年、二七五頁
- 14 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻』読売新聞社、二〇〇二年、二二三頁
- 15 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 下巻』読売新聞社、二〇〇二年、六五・六六頁
- 16 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上巻』読売新聞社、二〇〇二年、四二二頁
- 17 『浄土真宗聖典（注釈版第二版）』八三四頁
- 18 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 下巻』読売新聞社、二〇〇二年、一〇八頁
- 19 高田文英「仏教・真宗の生命観―人権・平和論への一視座―」『日本仏教学会年報』八三、二〇一八年
- 20 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上・下巻』読売新聞社、二〇〇二年
- 21 五木寛之『親鸞 激動編 上・下巻』講談社、二〇一二年

- 2 2 津本陽 『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 下巻』 読売新聞社、二〇〇二年
- 2 3 五木寛之 『親鸞 完結編 上巻』 講談社、二〇一四年、六〇・六一頁
- 2 4 五木寛之 『親鸞 完結編 上巻』 講談社、二〇一四年、一〇〇・一〇一頁
- 2 5 五木寛之 『親鸞 完結編 上・下巻』 講談社、二〇一四年
- 2 6 寺川幽芳 「親鸞の家族観」 『真宗学』 九一・九二合併号、一九九五年

コピー厳禁

参考文献

書籍

- 五木寛之『親鸞 上・下巻』講談社、二〇一〇年
- 五木寛之『親鸞 激動編 上・下巻』講談社、二〇一二年
- 五木寛之『親鸞 完結編 上・下巻』講談社、二〇一四年
- 五木寛之・立松和平『親鸞と道元』祥伝社、二〇一〇年
- 五木寛之『私訳歎異抄』東京書籍株式会社、二〇〇七年
- 津本陽『弥陀の橋は 親鸞聖人伝 上・下巻』読売新聞社、二〇〇二年
- 青木新門・上田紀行・津本陽・釈徹宗・高史明・松田正典・香山リカ・梯實圓『インタビュ―私と親鸞聖人』本願寺出版社、二〇一一年
- 大澤絢子『親鸞「六つの顔」はなぜ生まれたのか』筑摩書房、二〇一九年
- 吉本隆明『今に生きる親鸞』講談社、二〇〇一年
- 倉田百三『法然と親鸞の信仰 上・下』講談社、一九七七年
- 河田光夫『親鸞からの手紙を読み解く』明石書店、一九九六年
- 『浄土真宗聖典（注釈版第二版）』本願寺出版社

論文

寺川幽芳「親鸞の家族観」『真宗学』九一・九二合併号、一九九五年

高田文英「仏教・真宗の生命観―人権・平和論への一視座―」『日本仏教学会年報』八三、二〇一八年

コピー厳禁